

平成29年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業
(特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業)
成果報告書

実施機関名 (聖公会北海道学園)

1. テーマ

特別支援教育の視点からの円滑な園運営の構築と、教職員のアセスメント力の向上を目指して

2. 問題意識・提案背景

1) 背景・問題意識、提案理由

特別支援教育事例検討学習会「ぶどうの木」では、回を重ねる中で、保育者が自らの考えを述べながら、自分自身の保育について内省し、実践に即した力をつけてきている。

しかし、園長を中心とした、園運営としての年間を見通したPDCAサイクルの実施、特別支援教育コーディネーターの効果的な活用、適切なアセスメントによる個別の指導計画・個別の教育支援計画の作成と定期的な見直し、それらの教職員の共通理解を図る研修の定期的な実施等、園運営の年間計画、研修内容の見直しが課題である。

これらの諸課題の中でも、特に発達障害児のアセスメントに関しては、教員にとってデータの読み取りが難しく、心理検査の結果や、外部の心理士や医師のコメントも、ともすると鵜呑みにしてしまう傾向がある。適切なアセスメントが実施できなければ、個別の指導計画を的確に作成できないと思われる。教員にとってアセスメントの力量を向上させることは喫緊の課題であり、今後、専門家の力を借りながら、より深い子供の理解、より良い保育を教員に提案していく必要性を感じている。

また、特別支援教育コーディネーターの役割や、年間の仕事の流れも確立されていない。今後、園長のリーダーシップにより、特別支援教育の視点から、園運営を強化していく取組を行い、どの園でも実行可能となるようなモデルとしていきたいと考える。

3. 目的・目標

本事業では、次の3点を目的として行う。

1. 特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業運営協議会の助言、講評をもとに、「ぶどうの木」を中心とした聖公会北海道学園全体の特別支援教育の視点からの園運営を見直していく。
2. 個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成するにあたり、特別支援教育コー

ディネーターと教員を対象にしたアセスメントの力量を高めるプログラムを開発する。

3. 講演会、ホームページなどで本事業の取組について発信していく。

4. 主な成果

(目的1) 特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業運営協議会の助言、講評をもとに、「ぶどうの木」を中心とした聖公会北海道学園全体の特別支援教育の視点からの園運営を見直していく。

(目的1の成果)

① 園運営見直しに当たり、「ぶどうの木」参加の幼稚園教諭、保育園保育士を対象に、「特別支援教育アンケート」を実施することで、現時点での現場の先生方の困り感を把握していた。

特別支援教育アンケートから見える幼稚園・保育園体制の問題点

1) 個別の支援計画・指導計画について

- ・担任の負担の多さ
- ・年少児の場合、観察期間の短さ
- ・計画の作成内容をどうしたらよいかといった理解不足。
- ・計画通りに支援できないことの対応が不十分。

2) 計画の見直し (PDCA)

- ・担任だけで行うのか。全体の会議を開くのか。
- ・保育園は、毎月見直しができています。

3) 園体制

- ・全園児と障害児の受入れ人数とのバランス
- ・親との共通理解
- ・コーディネーターの日々の動き方
- ・連携会議の年間の持ち方・開催計画
- ・職員の会議の持ち方・開催計画

4) 職員の困りごと

- ・保護者をどのように支援していけばいいか。
- ・経験不足で自信がない。
- ・どこまで支援をしいのか、園の方針が伝わってこない。
- ・指導計画が本当に子供にあっているか自信がない。
- ・コーディネーター、担任、加配の先生のそれぞれの役割がよくわからない。
- ・卒園後の進路について自信をもって保護者にアドバイスできない。
- ・専門的な知識が不足している。

② 他幼稚園、保育園を視察し、園運営についてお聞きすることで、園体制の構築の参考としていく。また、小学校数校の特別支援の学校体制についても資料等を集めていく。

1) A 保育園 視察 (2018. 9. 27)

園児 32名 (0歳1名 1歳4名 2歳4名 3歳5名 4歳8名 5歳10名)
職員 14名

- ・この日は、チャプレンによる礼拝が行われた。少ない人数だが、みんな大きな声で聖歌を歌い、正座して、お祈りをしていた。
- ・「気になる子」として本日観察をする年少児Aは、遅れて登園。保育士に抱っこされて、参加していた。
- ・その後、ホールで、3歳児以上の子供たちは、集団ゲームを行ったが、最初のうちAは、なかなか参加できず、保育士の支援が必要であった。気が向いて参加しても、また、一人集団から抜けて、大好きな鉄棒の方に行ってしまう。鉄棒はとても得意であった。
- ・保育士の先生方は、適度に声をかけ、Aが興味を持てるように、工夫していた。Aは、集団から抜けることはあったが、みんなでゲームをしている雰囲気は好きなようで、鉄棒から戻ってきては、にこにこ参加していた。途中鉄棒に行ってしまう行為も、自然と保障されているところが良かった。
- ・ゲームに負けて泣いている子の頭を、Aが撫でる場面も見られ、お友達とのつながりも感じられた。
- ・かくれんぼでは、保育士の先生に上手に隠してもらい、一番最後に見つけられ、一等賞になった。
- ・また、2回目のかくれんぼでは、鬼に立候補し、じゃんけんで勝ち、鬼となった。顔を伏せて、70ぐらいまで数える場面では、動き回らず、じっと数えることができた。お友達を探す場面では、元気に「み一つけた！」といったが、お友達のお名前が分からない。先生から「お名前、教えて、って、聞いてごらん。」と促され、「お名前教えて。」と言えた。たまに飽きて、鉄棒へ行ったが、促されて、また鬼として、お友達を探し、楽しんでいた。

1. スーパーバイザー瀧澤聡氏、聖ミカエル幼稚園 園長渡部良子、職員によるコンサルテーション

- ・担当の保育士の先生としては、Aの突発的な行動、お友達との関わりが気になり、どのようにして行ったらよいか、という質問があった。

⇒瀧澤氏からは、「先生方は、自然な流れの中で、適切な指導ができている。」という見立てであった。渡部から見ても、穏やかな口調で、良いタイミングでAに声かけができているように感じた。

- ・主任から、自分たちの保育の方法が本当にあっているのか、自信がない、個別の支援計画を積極的に作成しているわけでもなく、活用もできていない、との課題が出された。

⇒瀧澤氏からは、十分自信を持っていい保育をしている、との評価があった。渡部からは、「次回の事例検討学習会「ぶどうの木」では、A君についてまとめることになっているので、文章として、先生方の保育をまとめることで、振り返りになり、今後の見通しもついてくる。」と伝えた。

2、訪問を終えて

- ・保育現場は、日々多忙で、一人一人の記録を十分に取っていくことは、職員の負担にもなってくる。しかし、詳しくなくても日々記録を取ることで、今後の保育の見通しができてくる。また、その記録が担当の職員だけでなく、全職員で共有することで、より保育の質は高まるだろう。
- ・特別支援の園体制を整えるためには、先生方が無理なく、負担を感じることなく記録を取ったり、それを利用したりできる仕組みが必要である、と感じた。

2) B 市立 C 幼稚園 視察 (2018. 10. 23)

園長先生 特別支援教育コーディネーターが対応

訪問者 聖ミカエル幼稚園 園長 渡部良子

①特別支援における年間の園としての現在の経営体制について

1) 教員の体制

- ・学級にクラス担任と副担任（特別支援担当）がいる。
- ・特別支援担当教員は、5名と特別支援コーディネーター、幼児教育支援員の6名。
- ・個別の教育支援計画は、担任ではなく、特別支援担当教員が作成する。
- ・毎週水曜日に担任が次週の週案を練るので、それを受けて、木曜日に支援担当者6名が次週の支援計画を立てている。
- ・保護者との相談は、副担任である特別支援担当の教員が行う。
- ・保護者に伝える場合は、担任、副担任、園長、コーディネーターが相談したうえで、どのように、だれが伝えるかを決めている。

※市立の幼稚園のため、職員全員が常勤職員であり、副担任が、特別支援の業務を請け負える環境にあった。聖ミカエル幼稚園の場合、副担任、個別支援の教員は、短時間のパート職員であるため、個別の教育支援計画、保護者の対応などは、担任が請け負わざるを得ないのが現状である。

※聖ミカエル幼稚園の、特別支援コーディネーターが担任を通さずに保護者と直に相談をする形は、やはり問題を感じる。どのような話がなされているかも、詳しくは伝わらないため、何か問題が起きても一人で対処する形となる。また、担任の学級づくりの方針が反映されないこともあり、問題は大きい。

2) 校内学びの支援委員会

- ・特別支援教育コーディネーターを中心として、役割を分担して、チームで支援していく。
- ・業務として、「連絡調整」「教育的支援の在り方の検討」「校内研修の実施」がある。
- ・校内学びの支援委員会を中心とした相談・支援が行われている。

※そもそも正規雇用教員が7人しかいない聖ミカエル幼稚園では、7人全員が委員として話し合いをしていくしかない。よって、「委員会」と銘打ってではなく、「職員会議」、「研修」という形で話し合いを行っていくことになるだろう。

3) C 幼稚園の特別支援教育の年間計画

月	個別の教育支援計画	保護者支援 他	関係機関との連携
4	・ 個人懇談、家庭訪問で情報収集	特別支援対象園児保護者会① ～方針説明、顔合わせ、サポートプラン、学校訪問、年間予定など	
5	・ 幼児の実態把握 「現在の様子」「長期目標と手立て」「短期目標と手立て」作成、検討	・ 個人懇談 ・ 学校見学希望調査、とりまとめ ・ 保護者会②～修了児保護者の話	・ 学校見学依頼 ・ 日程調整
6	・ 前期サポートプランを保護者に渡す（個人懇談）	・ 学校見学	・ 小学校見学
7	・ 個人懇談で、その時点までの聖歌と課題について確認 ・ 夏休み中後期プランを作成	・ 学校見学 ・ 保護者会③ ～学校見学を終えて情報交換	・ 小学校見学
8			
9	・ 後期プラン検討、保護者に渡す（個人懇談）		
10	・ 就学に必要な資料準備開始		
11		保護者会③ ～小学校の先生の話	
12	・ 個人懇談で、その時点までの成果と課題について確認		
1	・ 引継ぎシート、長期目標の成果と課題		幼保小連絡会
2	・ 個人懇談で、聖かと課題を確認 ・ サポートファイルまとめ		・ 公開保育2日間 (年長児の園での様子を小学校の先生方に見てもらう)
3	・ 次年度への引継ぎ事項作成 ・ 個人資料ファイルまとめ	・ 保護者会⑤ ～1年を振り返って	・ 小学校への引継ぎ

※ 年間の流れが明確になっている。

※ 個別の教育支援計画・指導計画の作成計画が緩やかである。私立の聖ミカエル幼稚園の場合、補助金申請締め切りの5月末までに支援計画を出さなくてはならないこともあり、春休みにとりあえず作ってしまっているが、新入園の園児に関しては、実際園生活が始まってしばらくしないと実態が分からないこともあり、実態と合わない計画が立ってしまうことがある。

※ 保護者支援に力を入れていることが分かる。小学校見学を幼稚園が取りまとめて1学期に行っている点は、大変良いと思う。また、小学校の先生からの話を一斉に聞く機会があることも良いと思う。

②特別支援教育コーディネーターの役割

・校内学びの支援委員会の推進役

(企画・立案・連絡調整・・・校内では支援委員会やケース検討会議の開催・担任への支援や相談・校内研修の実施
外部機関に対しては、関係機関からの情報収集、整理・関係機関等への相談
保護者に対しては、保護者からの相談への対応や、保護者との連携・全保護者に対する特別支援教育の理解)

3) 武蔵野東第二幼稚園 視察 (2018. 2. 23 午前中)

武蔵野東第二幼稚園 視察 (2018. 2. 23 午前中)

視察員 北翔大学准教授 瀧澤聡 聖ミカエル幼稚園 園長 渡部良子
岩見沢聖十字幼稚園 園長 菊地和子

対応して下さった先生 茂手木 清先生(前副園長) 河井 優子先生(特別支援コーディネーター)

以下は、茂手木先生、河井先生のお話と、冊子『武蔵野東第一・第二幼稚園の『混合教育』を支える仕組みについて (平成 28 年 3 月発行)』による。

1. 武蔵野東第二幼稚園について

・第二幼稚園を含む武蔵野東学園の最大の特徴は健常児と自閉症児が共に学ぶ『混合教育』と自閉症児の自立を促進する『生活療法』である。武蔵野学園は、武蔵野東第一幼稚園(年少児対象)、武蔵野東第二幼稚園(年中長児対象)、武蔵野東小学校、武蔵野東中学校、武蔵野東高等専修学校、武蔵野東教育センターがある。

・第一、第二幼稚園の全園児 550 名ほどのうち、自閉症児は 60 名ほどである。

2. 個別の指導計画について

1) AGE システム

・武蔵野東学園では、教育システムを明確化し、「AGE(Assessment, Goals&Objectives, Evaluation)システム」と名付けている。根底にある考えとして、「教師のみならず保護者も子供の特性や現時点でどのような力が身につけているかを互いに共通理解をして把握し、そのうえで、目標を設定し、その目標に即した指導を行い、到達の度合いを評価する」というものだ。

・AGE 個人教育目標(個別の指導計画)は、生活面、言語・コミュニケーション、知的開発面の 3 つについて目標を立てていく。目標の横には手立ても記入し、家庭でも取り組みやすいように工夫する(生活療法)とともに、その成果を保護者と幼稚園とが別々に記述して照合し、次の目標を立てるときに参考にする。このようにして 1 年に 4 回保護者との懇談を持ち(AGE 懇談)、教員、保護者の評価をもとに、年 6 回目標を立てていく。

・個別指導計画のための情報となる記録として、「生育調査書」「プランノート(保護者による毎日の記録)」「個人指導の記録」「ポートフォリオシート(成長のエピソード)」「園児の情報(1 年の成長記録)」がある。

- ・個人懇談や、月々の目標設定の時の参考になるものとして、「AGE 課題項目集」がある。AGE システムの根幹となるもので、高等専修学校卒業までに習得しておいた方がいい課題を 10 の分野に) 分けておおよその段階を設定している。それぞれの分野の項目をすべて合わせると 500 を超える項目となる。

3. 保護者との連携

1) 幼稚園から保護者への情報提供や連携

- ・自閉症児の保護者を対象とした研修会の実施 (月 1 回)
- ・自閉症児の保護者を対象とした個別の面談 (年 4 回)
- ・年少、中、長の学年ごとの通常クラスの保護者を対象とした保護者会の実施
- ・幼児の育ちの姿を画像で示した書類や、目標等の共有をはかる書類の発行

等

2) 保護者同士の連携

- ・自閉症児の保護者同士の連携 (茶話会・上級校の保護者と一緒に実施する行事の設定)
- ・自閉症児クラスの保護者と通常クラスの保護者との連携 (保護者同士も相互理解、交流を実施することを目的にした保護者サークルの自主運営の実施)

視察を終えて

- ・園独自の AGE システムが存在し、丁寧に園児の記録がとられ、活用されているところが素晴らしいと感じた。
- ・保護者との連携を大切にしている、「生活療法」を行うため幼稚園でも家庭でも同じ目標を持ち、子供に働きかけていることが、子供の発達に良い影響を与えていると感じた。
- ・保護者との勉強会も細やかに計画されている。
- ・保護者主催の学習会や茶話会が開かれ、自閉症児クラスと通常クラスの保護者の垣根がなく、相互理解が進んでいる。
- ・自閉症児クラスの年中組と年長組を見学した。給食時間だったが、ひとクラス 10 人ほどの園児に教員が 2 名ついていた。どの子も落ち着いて食事をとっており、年少時にしっかりとした保育がなされていたことがうかがえた。

※自閉症児を受け入れて 50 年以上たつ武蔵野東学園と、私たちの聖公会北海道学園とでは比較することもできない。また、聖公会北海道学園は、発達障害児も定型発達児も同じ保育室で常に生活をしている点も違いはある。ただ、「どのお子さんをも成長させたい。丁寧な保育をしたい。」という思いは一致しているように感じた。特に年間何度も持たれる保護者との個別な面談や連携については、聖ミカエル幼稚園も 2018 年度は計画的に進めていきたいと感じた。

4) A 町立 H 小学校 資料

5) 札幌市立 S 小学校 資料

- ・H 小学校、S 小学校とも、年間計画、特別支援教育コーディネーター役割が明確であった。小学校と幼稚園では規模も、教職員数も、違うため同じようにはできないが、園運営の計画を立てるために、大変参考になった。

③ ①、②に基づき、2018年度の園運営計画を作成していく。

2018年度の年間計画、特別支援コーディネーターの職務分担については以下の通り

1) 特別支援教育1年間の流れ】

月	仕 事 内 容
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・市特別支援補助金報告書提出 ・進級児→4月からの利用支援機関のアンケートと4月の面談日程のお手紙配布 ・疾患のある園児には、新年度に規定の診断書提出依頼 ・新入園児→春休み中の面談日程のお手紙配布 ・進級児→3学期の様子をまとめて、園内で検討 ・面談に向けての資料作り(保護者用、面談用) ・春休み中にWISCなど発達検査を行うことも有り ・面談前に面談内容打合わせ(担任、園長、コーディネーター) ・1年間の振り返り(仕事内容等)評価と計画の見直し
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・春休み中に新入園児面談(園長、コーディネーター、個別支援の先生) ・始業式以降進級児の保護者面談(園長、担任、コーディネーター、個別支援の先生) ・個別の指導計画作成(担任、コーディネーター) ・第1回学びの支援委員会(支援の必要な園児の理解、緊急時対応、利用機関確認) ・ぶどうの木運営協議会
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・道特別支援補助金申請書提出 ・新学期開始からの様子を見て園内検討 →家庭訪問や個人懇談での確認事項があれば依頼する ・家庭訪問 ・個人懇談→必要であればコーディネーター入る
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回学びの支援委員会(個別の指導計画について) ・夏休み中の連携会議について計画する →日程を調整して利用医療機関、支援機関に連絡する ・夏休み中の面談日程組んで、お手紙を配布する
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期の支援の園児の様子をまとめる(面談用、園内用) ・面談の前に面談内容打合わせ(園長、担任、コーディネーター) ・第3回学びの支援委員会(1学期の個別の指導計画について振り返り) ・夏休み中に面談、連携会議(保護者、担任、園長、コーディネーター、支援機関) ・個別の指導計画作成
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・WISCなど発達検査を行うこともあり ・面談、連携会議をまとめて、2学期の計画を考える ・始業式前に園内連携会議

	<ul style="list-style-type: none"> ・第4回学びの支援委員会(2学期の個別の指導計画について) ・ぶどうの木運営協議会
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の様子を見て園内検討 ・新入園児について検討する
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・入園受付で注意して見る新入園児を検討 ・幼保小連絡会実施のお知らせがくるので、園内で決めて保護者に同意
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・幼保小連絡会返信する ・冬休み中の連携会議について計画する →必要であれば日程を調整して利用医療機関、支援機関に連絡する ・冬休み中の面談日程組んで、お手紙を配布する ・2学期の支援の園児の様子をまとめる(面談用、園内用) ・面談の前に面談内容打合わせ ・ぶどうの木運営委員会 ・LD学会ポスター発表 ・入園願書受付
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・冬休み中に面談、連携会議 ・WISCなど発達検査を行うこともあり ・第5回学びの支援委員会(2学期の個別の指導計画について振り返り)
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・面談、連携会議をまとめて、2学期の計画を考える ・始業式前に園内連携会議 ・ぶどうの木運営委員会 ・個別の指導計画作成 ・小学校への引継ぎ ・第6回学びの支援委員会(3学期の個別の指導計画について)
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・新入園児の家庭状況調査表見て面談等検討…クラス分け ・希望者個人懇談(必要であれば懇談に参加)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・個別支援の先生の配置を考える→次年度の個別支援について検討 ・幼児教育支援員…チェックシートの提出 ・保育所等訪問支援員…ケース検討資料提出 ・瀧澤先生…ケース検討資料提出 ・園内研修計画 ・コーディネーターの仕事の理解啓発→職員 ・特別支援教育について保護者への理解啓発(理解の推進)

※来年度は、長期休みごとに、保護者との面談を行い、次の学期の個別の指導計画の見直し、次学期の目標を保護者とともに立てていくこととした。

※個別の教育支援計画については、札幌市で配布している「サポートファイルさっぽろ」を使用することとし、幼稚園で印刷し、長期保存に適しているプラスチックファイルにまとめて、保護者に手渡した。毎学期の面談や、日々の相談の中で活用していきたい。

※一年に2回、希望する全保護者を対象に、発達障害や、その他の障害についての学習会を行い、保護者の理解を深めていきたいと考えている。

※教職員に対しては、日々の振り返りや、各月の職員会議において、子供たちの成長の様子

や、気になる様子などを共有するようにしたい。

2) 特別支援教育コーディネーターの任命と仕事の明確化

- ・今年度は、特別支援教育コーディネーターを2名任命した。(1名は短時間勤務職員、1名は、正規職員で、朝預かり、週1回登園する園児の個別支援も担当。)
- ・仕事内容
園児、未就園クラス観察・連携機関との連絡調整・小学校との接続・保護者相談・連携会議開催・園内研修会・ぶどうの木運営・文部科学省委託事業(本事業)園長補佐

(目的2) 個別の指導計画及び個別の教育支援計画を作成するにあたり、特別支援教育コーディネーターと教員を対象にしたアセスメントの力量を高めるプログラムの開発

(目的2の成果)

- ① 「第13回ぶどうの木(特別支援教育事例検討学習会)」(2017.11.18)において、事例検討学習会の実施。また、瀧澤氏よりアセスメント講習実施。「事例検討会と個別の指導計画との関連」について講義
- ② 「第14回ぶどうの木」(2018.1.13)
事例検討学習会の実施。また、瀧澤聡氏よりアセスメント講習会。
- ③ 「WISCIV 研修会」(2018.3.24実施)
・法人幼稚園、関連保育園の教員、保育士を対象に、ウエスクラー系の検査は子供のどのような力を図っているのか、また結果をどのように活用していけばよいかについて研修を行った。検査ができるようになる研修ではなく、あくまでも現場の先生の知能検査や発達検査への理解及びその活用を深めることを目的とした。当日は、年度末ということもあって、参加園は3園であったが、4グループに分かれ、聖ミカエル幼稚園の事例をもとにしながら、各グループに心理職のボランティアがつき、各指標がどのような力を図っているのか体験をすることができた。

(目的3) 講演会、ホームページなどで本事業の取組について発信する。

(目的3の成果)

- ① 日本聖公会保育者連盟の設置者・園長研修会において、「ぶどうの木」の取組、本事業の取組について提言した。(2018.2.24)
- ② 幼稚園ホームページにおいて、今後取組を発信していく予定。

5. 教育委員会及び指定校における取組概要

① 専門家を活用した学校経営計画等の策定

・学校経営スーパーバイザーとして瀧澤聡氏を招請し、以下の活動を行う。

- 1) 2年間で3回(1年次1回、2年次2回)の聖ミカエル幼稚園訪問の中で、支援を必要とする園児の観察、保育者への助言を行う。また、特別支援を推進するための学校体制作りに向けて、園長から説明を受け、コンサルテーションを実施する。
- 2) 2年間で6回(1年次各1回、2年次各2回)、同法人の岩見沢聖十字幼稚園と、帯広聖公会幼稚園の訪問において、支援を必要とする園児の観察、保育者への助言を行う。また、特別支援を推進するための学校体制の現状と、改善について、コンサルテーションを行う。(聖ミカエル幼稚園園長も同行し、コンサルテーションに参加し、園経営の在り方について比較検討をする。)
- 3) 2年間で8回(1年次3回、2年次5回)の特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業運営協議会において、聖ミカエル幼稚園の幼稚園経営についてのコンサルテーションを実施する。
- 4) 2年間で8回(1年次3回、2年次5回)の特別支援教育学習会「ぶどうの木」において、幼児の実態に即した個別の指導計画、個別の教育支援計画作成のためのアセスメント講習を行う。
- 5) 視察に同行し、授業研究、園児指導、教育相談、合理的配慮の設定を組み込んだ個別の教育支援計画・個別の指導計画の運用等、学校経営計画の見直しの理解が深化できるように助言を得る。
- 6) 本事業1年目の成果について、日本LD学会においてポスター発表できるように助言を得る。

(主な成果)

- 1) 11月29日(水)に、聖ミカエル幼稚園において一回の園児観察を終了した。引き続き1月(2018.1.4)にコンサルテーションを行った。
- 2) 深川あけぼの保育園の視察、コンサルテーションを終えた。
 - ・岩見沢聖十字幼稚園の視察、コンサルテーションを終えた。
- 3) 帯広聖公会幼稚園の視察を予定していたが、吹雪のため交通機関が動かず、実現しなかった。
- 4) 11月18日(土)に第1回学校経営構築研究開発事業運営協議会において、「ぶどうの木」に集まる、同法人の教諭、系列保育園の保育士に、以前配布した特別支援教育のアンケートの集計したものをもとに話し合いがなされた。

瀧澤氏、伊藤氏より、個別の支援計画と個別の指導計画の違いなどの説明があった。
- 5) 「ぶどうの木」の最後の講評の中で、瀧澤氏より「事例検討会の講評・個別の指導計画との関連」と題し、「ぶどうの木」の講評の中で、今行っている事例検討資料の作成こそが、アセスメントの目を養い、PDCAサ

イクルの形を作る訓練になっているとのお話があった。

② 合理的配慮の提供に係る体制整備の在り方

・発達障害児等に対する適切なアセスメントによる個別の指導計画と個別の教育支援計画を作成しながら、個々の合理的配慮について検討する。そして、PDCAサイクルによる定期的な見直しにより、実態に即した保育が行われるよう、園運営計画を策定していく。

・特別支援教育コーディネーター、担任、個別の支援員等、特別支援教育にかかわる教員の役割分担を明確にし、合理的配慮の提供が円滑に行われる仕組みづくりを進める。

・学校法人内の特別支援教育学習会「ぶどうの木」において、発達障害児の理解が深まるよう、事例学習会、アセスメント講習会を計画していく。

(主な成果)

・今年度は、自園の問題点の洗い出し、他園の視察を通して、3月に園運営計画、各教員の役割分担を策定した。また、事例学習会、アセスメント講習会を引き続き行っていく。

③ 発達障害等の可能性のある幼児児童生徒を取り巻くいじめの防止、不登校対策等の生徒指導上の学校課題に対する体制整備の在り方

キリスト教精神に基づく保育の中で、子供たちに互いを思いやる心を身に付けていくための理念を教職員、保護者、園児に啓発していく。具体的な取組としては、教職員向けキリスト教学習会、保護者向けの「聖書による子育て講座」を学期ごとに開催していく。特に教職員については、その学びの中で、どの子供もクラスの中で大切な存在として尊重されるようなクラスの雰囲気づくりを目指す。また、園児に向けては、クラスでの毎日の朝と帰りのお祈りや子供の心を育てる良い絵本の読み聞かせ異年齢の小集団中で、対人関係の力を育てることを目指す。

・発達障害の幼児が日々安心して園生活を送り、また、不安を感じることなく小学校へ入学していけるように、特別支援教育コーディネーターを中心として、市の教育センター、関連事業所、医療機関、小学校との連携を強化していく。

(主な成果)

・定期的な教職員向け、保護者向けのキリスト教の学習会を続けている。聖ミカエル幼稚園には、発達障害のお子さんが多く在籍しているが、障害のあるなしを超えて、保護者同士のきずなは強く、お互いに助け合う気風がある。また、こうした環境から、子供たちも自然な形で一緒に生活している。

・小学校の接続に関しては、札幌市の幼保小連携推進協議会が中心となり、幼稚園と学校との顔の見えるつながりができている。それに加え、聖ミカエル幼稚園では、小学校の先生方を対象とした参観日を設け、全ての年長児について、小学校の先生方に見ていただく機会を設けている。今年度は、2月に実施し、細やかに引継ぎを行うことができた。

④ 特別支援教育コーディネーターの活動状況

・指名している人数 1名

・指名している者ごとの具体的な職務内容(校長、教頭等管理職との役割分担)

① 個別の支援計画作成計画 ②外部との連携 ③保護者支援

- ・軽減している職務内容
担任外、主幹を兼ねる。
- ・特別支援教育コーディネーターとして職務に従事している時間数（月平均）
100 時間
- ・特別支援教育コーディネーターの人選方法や必要な資質
今年度までは、年長者が経験を生かして行っていたが、手探り状態であった。来年度は、元小学校特別支援学級の教員が加わることとなったので、より発展した活動が期待できる。
- ・特別支援教育コーディネーターの学校における通常の役職、任期
主幹 任期は1年ごとの更新
- ・特別支援教育コーディネーター育成のための教育委員会としての取組
札幌市立幼稚園対象には、講習会が計画されているようだが、私立幼稚園対象には行われておらず、手探りの状態である。

6. 今後の課題と対応

- ・次年度は、年間計画を行いながら、取組の見直しを行っていく。また、取組の経過をまとめ、LD 学会において、ポスター発表を行っていく。

7. 指定校について

(幼稚園) (平成 30 年 3 月 31 日現在)

指定校名：												
	3歳				4歳				5歳			
	在園者数		学級数		在園者数		学級数		在園者数		学級数	
	30				26				30		異年齢3	
	園長	副園長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	講師	教育 補助員	事務職員	特別 支援 支援	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	1	1	0	8	0	1		2	3	0	1	17

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：1

8. 問い合わせ先

組織名：聖公会北海道学園 聖ミカエル幼稚園

- (1) 担当部署
- (2) 所在地 札幌市東区北 19 条東 3 丁目 4 番 5 号
- (3) 電話番号 011-731-8705
- (4) FAX 番号 011-731-8706
- (5) メールアドレス Watanabe@michael.ed.jp